

感染症定期報告感染症別文献一覧表(2025/4/1～2025/7/31)

ID	感染症(PT)	出典	概要
1	ウイルス感染	J Infect Dis. 231(2025)495-500	著者らの最近の報告において、エジプトのフルーツコウモリにおける新しいボックスウイルス(IsrRAPXV)の同定が解説されている。今回、全身症状と手の重症有痛性皮膚病変のために入院した女性患者において同定されたボックスウイルスについて述べる。病原体としての本ボックスウイルスを同定及び特徴付けするために、qPCR、全ゲノムシーケンス解析及び系統発生的解析を実施した。皮膚病変から採取された検体は、PCRによってIsrRAPXVの存在が陽性であった。さらに、系統発生的解析は、本ウイルスが当初フルーツコウモリにおける皮膚病変の原因物質として報告されたIsrRAPXVと同一であることを示した。 【症例経過】2023年5月22日、38歳女性が手に多発性有痛性ボックス様皮膚病変を伴う全身性疾患で医療センターに入院した。皮膚病変に最初に気づいたのは入院前の5月18日であった。5月19日、病変は大きく厚くなり、痛みを伴い更なる病変が現れた。5月20日、極度の疲労、全身倦怠、筋肉痛に加え、発汗過多、1日5回に及ぶ水性下痢及び咽喉痛を呈した。このインフルエンザ様症状は入院した5月22日の朝まで続いた。この間、病変は膿疱性かつ有痛性になった。入院中に、すでに全身症状は寛解期になっており、リンパ節症は観察されなかった。病変は入院の最初の3日間に増大し、その後次第に治まり、瘢痕が残った。本症例はここ数年間、イスラエルのコウモリ保護団体においてボランティア活動をしており、病気のコウモリの「里親家庭」を運営していると報告した。コウモリと接触する際、日常的に個人防護具を使用しておらず、頻繁にコウモリの咬傷により手に挫傷が出来ていた。症状が現れる前、自宅で6匹の哺乳期コウモリの世話をしており、うち1匹が病気で死亡していた。世話をしていた際、そのコウモリの翼には病変がみられ、IsrRAPXVに感染した病気の哺乳コウモリの翼において確認されたボックス病変と類似していた。本症例が同僚に聞き取り調査を行ったところ、さらに4例のボランティアがコウモリによる咬傷部位の手指に限定した同様のボックス病変を伴う同様の症状を有していたことが判明した。4例は、ボックス病変は数週間で消失したと述べている。全例が医療機関を受診しておらず、公衆衛生当局にも通報していない。4例は更なる情報提供に消極的であったため、未確定の症例のみである。 【考察】今回の所見から、IsrRAPXVが病気の哺乳コウモリからヒトに伝播し、哺乳コウモリの翼の病変に直接手で触れるか、咬まれることによって起こる可能性が高いことを示唆している。人獣共通感染症のボックスウイルスの重要性は見逃せない。ボックスウイルスは種の壁を越えることができ、ヒトに脅威を与える。今回報告された症例とその同僚は自己限定的な軽度の感染症であり、ヒトからヒトへの感染の証拠は認められなかった。しかし、この結果は将来ヒトの宿主で重症化する可能性を否定するものではない。今回の調査結果やコウモリの人獣共通感染症のリスクを考慮すると、コウモリとヒトの交流に関する公式な安全ガイドラインを公衆衛生当局が発行することを強く推奨する。
2	ウイルス感染	J Med Virol. 96(2024)e29711	【概要】Restvirusは、以前に発見されたStatovirusと類似しているが、遺伝的に異なることが確認された。 【方法】2016年から2019年にかけて北京で行われた多施設監視研究に基づいており、ヒトコロナウイルスOC43感染患者5名の呼吸器サンプルからRestvirusのゲノムを特定した。Restvirusのゲノムは、他のStatovirusと比較して異なる進化的特徴を持ち、呼吸器疾患の原因となる可能性があるとされている。 【結論】Restvirusの病原性と公衆衛生上の重要性を明らかにするためのさらなる調査が必要である。
3	ウイルス感染	N Engl J Med. 392(2025)200-202	中国北東部のモニタリング病院で、ダニに刺され間もなく発熱した患者を積極的にモニターすることにより、潜在的な原因物質が特定された。2023年5月から7月にかけて252名の発熱患者から採取した血清サンプルのメタトランスクリプトームシーケンス、2名の患者から採取した血清サンプルの<i>de novo</i>アセンブリ実施後の系統解析により、ナイロウイルス科のオルソナイロウイルス属に属する新種のウイルス(暫定的に「Xue-Chengウイルス(XCV)」と命名)が発見された。XCVゲノムを含む血清をVero 81細胞に接種したところ、XCV分離株で細胞変性作用が光学顕微鏡により確認された。また免疫蛍光法によりXCV抗原、及び電子顕微鏡により典型的なオルソナイロウイルスの形態学的特徴が確認された。 XCV感染患者の臨床症状は、非特異的な急性熱性疾患から入院を必要とする重症例まで多岐にわたった。頻繁に観察された検査値異常には、白血球減少症及び血清中の肝アミノトランスフェラーゼ、乳酸脱水素酵素、α-ヒドロキシ酪酸脱水素酵素、アミロイド蛋白A、高感度C反応性蛋白のレベル上昇が含まれた。以上のデータより、発熱性疾患の原因となる新種のダニ媒介性オルソナイロウイルス種の発見を示唆している。
4	ウイルス感染	ProMED-mail 20241031.8719710	フロリダのマウス1例において、ヒトに感染する可能性のある新たなウイルスが検出された。本マウスは、研究者のペットのネコにより持ち込まれた。このネコは、この新種のゼロ号患者であるが、本ウイルスの影響を受けていないと考えられる。Gainesville rodent jeilongvirus 1と命名されたこの新たなウイルスは、異なるさまざまな種の細胞に感染する能力があると考えられており、ウイルスがある種から別の種に感染するスピロオーバーイベントの元となる。同ウイルスは、齧歯類、ヒト、非ヒト霊長類(サル)の細胞で同様に活発に増殖し、スピロオーバーイベントの元となる可能性が高いと同研究者は述べた。ヒトにおいてjeilongvirusによる疾患の症例は確認されていないが、ヘニパウイルス(致死的なニパウイルスを含む)と密接な関連性があることから、動物からヒトに感染する能力がある可能性が示唆されること等について記載。

ID	感染症(PT)	出典	概要
5	ウイルス感染	ProMED-mail 20250112.8721280	中国北東部のセンチネル病院において潜在的な病原体を特定するため、最近ダニに刺された発熱患者の積極的監視が実施された。2023年5月から7月にかけて発熱患者252例から採取した血清サンプルのメタトランスクリプトーム配列解析を実施した。また、2例から採取した血清サンプルで特定された未知のウイルスのゲノムを構築するため、新規アセンブリを使用した。系統ゲノム解析により、本ウイルスはナイロウイルス科オルソナイロウイルス属に属することが明らかになったが、RNA依存性RNAポリメラーゼタンパク質のアミノ酸同一性はすべての既知のオルソナイロウイルス属種と75.6%未満であり、新種であることが示唆された。この新種は最初に確認された牡丹江市の地名にちなんで、Xue-Cheng virus (XCV)と暫定的に命名された。2022年から2024年の5月から7月にかけての期間を追加し、792例から採取した血清サンプル中のXCVを検出するため、リアルタイムポリメラーゼ連鎖反応 (RT-PCR) 分析とサンガー配列決定を実施した。この分析では、 <i>Rickettsia raoultii</i> に重複感染していた1例を除き、PCR又はRT-PCR分析で他のダニ媒介性感染症が陰性であった26例のXCV感染患者を特定した。血清サンプルをペアにした15例では、ベースラインのIgG抗体価が4倍に増加した。26例の臨床症状は、非特異的な急性発熱性疾患から入院に至る重度の疾患まで多岐にわたった。頻繁に観察される検査値異常として、白血球減少症並びに肝アミノトランスフェラーゼ、乳酸脱水素酵素、 α ヒドロキシ酪酸脱水素酵素、アミロイド蛋白A及び過敏性C反応性蛋白の血清レベル増加が含まれた。感染患者が確認された地域では、イスカチマダニの6%とヤマトチマダニの3.2%からXCVが検出された。系統樹では、ダニ由来の4つのXCVゲノムが2つのヒト由来ゲノムとクラスター化した。これらのデータは、発熱性疾患の原因としてダニ媒介性オルソナイロウイルスの新たな種の存在を示唆している。
6	ウイルス感染	Vet Res. 56(2025)32	ペスチウイルスはフラビウイルス科に属するRNAウイルスで、広い宿主域を持つ。その病原性は非常に多様で、畜産業において大きな経済的損失をもたらしている。2023年4～5月に中国四川省の養豚場で原因不明の疾患が発生した。このアウトブレイクは最初に流産、死産、ミイラ化した胎児の出産を含む雌ブタの生殖障害が、続いて仔ブタの先天性振戦と死亡が発生した。仔ブタの先天性振戦有病率は約70%で、全体の死亡率は約20%であった。様々な広域抗生物質がブタに投与されたがいずれも効果がなかった。流産胎児及び先天性振戦を呈した仔ブタから採取された臨床試料の分析が行われ、肺組織及び脳組織から新規ペスチウイルスが検出された。この新たに同定されたウイルスはブタ流産関連ペスチウイルス (PAAPeV)と命名された。系統解析の結果、PAAPeVはWenzhou Pipistrellus abramus pestivirusに近縁だが異なる分枝でクラスターを形成し、新種であることが示唆された。病原性評価のための動物実験の結果、PAAPeV感染は仔ブタとマウスの著しい病理組織学的変化を引き起こし、ウイルス血症と様々な臓器での高いウイルスゲノム量が認められた。 <i>in vitro</i> 試験では、PAAPeVはブタ精巣細胞で健全な複製を示し、ヒト細胞 (A549、HepG2) では2世代まで、サル細胞 (Vero) では6世代までの限定された複製を示した。ブタサーコウイルス3型は <i>in vitro</i> では限定的な複製を示すが、ブタにおいては複製能を有し疾患を引き起こすことが報告されている。したがってPAAPeVがヒトやサルに感染する可能性は否定できない。全体的に見ると、PAAPeVはブタとマウスの両方に感染し、他の哺乳類にも感染する可能性があり、種を超えて伝播する能力を示している。これは養豚業と公衆衛生に重大なリスクをもたらす。新たに発見されたウイルスであるため、PAAPeVの有病率、発症機序、種間伝播能を明らかにするためのさらなる研究が必要である。
7	オロプーシェ熱	ProMED-mail 20241123.8720188	2024年6月21日、歴史的に本疾患が発生していなかったブラジルセアラ州においてOropouche virus (OROV)感染1例が、積極的な検査サーベイランスを通じて遡及的に確認された。系統的な調査により171例が特定され、その大半はBaturité山塊の農村部に集中していた。この地域の農地は、OROVのヒトへの感染に主に関与するベクターであるヌカカにとって好条件となっている。妊娠中のOROV感染により死産に至った症例を報告する。2024年7月24日、40歳女性(妊娠3回、出産経験1回、24歳で妊娠初期の妊娠喪失)において、妊娠30週3日に発熱、悪寒、全身性筋肉痛及び重度の頭痛が発現した。定期的な妊娠管理を受けており、妊娠糖尿病に対してメトホルミンが投与されていた。定期的な産科超音波検査を4回受けていたが、いずれも異常は認められなかった。2024年7月27日、軽度の膣出血と暗色膣分泌物があったため受診した。超音波検査では胎児の推定体重が在胎週数の97.5パーセンタイルを超えており、胎児性巨大児と判明したが、他の異常は認められなかった。2024年8月5日、持続する発熱と軽い膣出血を呈し、2024年7月31日以降胎児の動きが減少していることに気づいた。超音波検査で胎児死亡が確認された。初回評価時に採取された母体血液の分子診断検査により、急性OROV感染が確認された。デングウイルス、ジカウイルス、チクングニアウイルス及びマヤロウイルスは陰性であり、更なる検査で死産を引き起こす可能性のある他の感染症や疾患はみられなかった。検査の結果、体重2190g、グレード3の軟化(推定死後8日以上経過)、明らかな奇形のない死産男児であることが判明した。胎盤には梗塞の兆候がみられた。OROV RNAは、脳脊髄液(サイクル閾値[Ct]値、21)、脳(Ct値、34)、肺(両肺のCt値、33)、肝臓(Ct値、34)、臍帯(Ct値、33)、胎盤(Ct値、32)を含む複数の胎児サンプルで検出された。これらの数値により垂直伝播の発生が確認された。胎児組織の病理組織学的解析は自己融解によって制限された。IQ-TREEマルチコアソフトウェアバージョン2.1.1を用いて各OROVセグメントの連結されたほぼ完全な配列を最大尤度推論により系統学的再構築した。これらの配列は最近報告されたOROVBR-2019-2024系統とクラスター化され、現在進行中のアウトブレイクで循環している株との系統関係が確認された系統ゲノム解析の結果は、本症例における死産とブラジルで現在進行中のOROVのアウトブレイクとの関連を裏付けのものであった。これらの調査結果は妊娠中のOROV感染のリスク、また本ウイルスが流行している地域、新たに出現した地域に居住している、又は訪問し、発熱やその他の疑わしい症状を呈する妊婦において本感染を考慮する必要があることを強調している。
8	カンピロバクター感染	Journal of infection. 89(2024)106265	米国におけるカンピロバクター感染源を特定するための全国調査データのレトロスペクティブ解析に関する報告。米国における全国サーベイランス(2009～2019年)中に、ヒト感染症由来の8856のカンピロバクターの分離株を収集し、可能性のある感染源由来の16703のゲノム配列を決定した。機械学習と確率論的モデルを用いて、宿主適応に関連する遺伝的変異を標的としてヒトの感染源を特定し、異なる疾患保有宿主の重要性を推定した。ヒトへの感染の主な原因は家禽で、症例の推定68%であった。次いでウシ(28%)、野鳥(3%)及び豚肉源(1%)であった。また、特にニワトリ由来の分離株では、多剤耐性菌の増加が確認された。ニワトリが感染源とされた症例の割合が最も低かった保健福祉省第8地域では、カンピロバクター症例の感染源として、かなりの割合で、ウシ(<i>Campylobacter jejuni</i> 症例の49%)及び豚肉(<i>Campylobacter coli</i> 症例の26%)が占めていた。全国的なサーベイランスと感染源の特定が政策の指針となり、家禽を対象とした介入が、米国におけるカンピロバクター症及び多剤耐性菌の蔓延を最も減少させることを本研究は示唆している。
9	クラミジア性肺炎	Lancet Infect Dis. 25(2025)198-207	2022年12月、オランダで鳥類由来の <i>Chlamydia abortus</i> 株が家族4人に呼吸器疾患のクラスターを引き起こした。3人が市中肺炎で入院し、うち1人が集中治療室に入院した。野鳥の糞便が最初の感染源と考えられた。家族2人についてはヒトからヒトへの感染経路が考えられた。過去に鳥類由来 <i>C. abortus</i> 株が確認された症例は10件あり、全患者が入院し、少なくとも5人が肺炎を発症し、1名が死亡している。

ID	感染症(PT)	出典	概要
10	コロナウイルス感染	Emerging Microbes & Infections. 14(2025)2466705	【概要】韓国でCOVID-19とは異なる新しいヒトコロナウイルス(HCoV)が発見された。このウイルスはアルファコロナウイルスファミリーに属し、肺炎の症状がある生後103日の乳児から検出された。 【患者の症状】感染した乳児は発熱、咳、痰、鼻水、急性中耳炎、肝機能異常等の症状を示し、肺炎が認められた。保存的治療により症状は改善し、8日後に退院した。 【ウイルスの由来】研究者たちは、韓国の野生のげっ歯類、特にアカネズミ属がこのウイルスの自然宿主である可能性が高いと考えている。調査では、16匹のアカネズミ属が新型アルファコロナウイルスに感染していることが確認された。 【遺伝的類似性】新しいウイルスは既存のHCoVとは遺伝的に異なり、げっ歯類由来のアルファウイルスと密接に関連している。 【公衆衛生への影響】このウイルスの感染経路と病原性を分析し、対策を開発する必要がある。ヒトからヒトへの感染の可能性については、さらなる研究が必要である。
11	コロナウイルス感染	ProMED-mail 20250228.8722484	韓国におけるCOVID-19とは異なる新たなヒトコロナウイルスによる初めてのヒト感染例が確認された。研究者らは、2022年に肺炎症状を呈し高麗大学病院に入院していた103日齢の乳児1例の検体を分析した。患児は発熱、咳嗽、痰及び鼻汁を含む呼吸器症状を呈し、急性中耳炎及び肝機能異常も有していた。肝機能及び呼吸器症状は保存療法で改善し、8日後に退院した。研究チームは発生源の特定のため、2018年から2022年に採取された野生のヤマネ880匹のウイルス感染を検査した。そのうち16匹(1.8%)が新型アルファコロナウイルスに感染していたことが判明し、乳児で確認されたウイルスと93.0%から96.8%の高い遺伝的類似性を示した。本ウイルスはヒトコロナウイルス(229E、NL63、OC43、HKU1)とは遺伝的に異なり、げっ歯類に由来する可能性が高い。げっ歯類がウイルスの自然宿主である可能性が高いが、感染経路はいまだ不明である。COVID-19は主に肺炎を引き起こしているが、本ウイルスは肝機能障害や肺炎に関連していた。ヒト-ヒト感染の可能性については更なる研究が必要である。これまでのヒトコロナウイルスよりも、中国及び韓国で確認されたげっ歯類由来のアルファウイルス(AcCoV-JC34)に近かった。本ウイルスは動物からヒトに跳躍した新しい形態のウイルスである可能性が高い。
12	サル痘	CIDRAP. https://www.cidrap.umn.edu/mpox/china-reports-mpox-clade-1b-cluster	中国CDCは2025年1月9日、コンゴ民主共和国に居住していた外国人1人と濃厚接触者4人が関与する、中国初となるクレード1bエムボックス症例の確認を発表した。初感染者の濃厚接触者4人は主に発疹等の軽度の症状が見られ、初感染者の接触者に追加の感染は確認されていない。患者は治療を受けており、経過観察中である。中国は、アフリカ以外でクレード1bエムボックスを検出した12番目の国であり、アフリカ以外では英国、ドイツ、中国で限定的な二次感染が報告されている。
13	ハンタウイルス感染	ProMED-mail 20250701.8725348	ドイツのバイエルン州ではハンタウイルス感染症が急増している。特にヴェルツブルク、アシャッフエンブルク、シュヴァーベン・アルプ地方周辺では、2024年の2倍の症例が報告されている。ハンタウイルスは、ヨーロッパヤチネズミが原因となり、尿、糞、唾液を介してウイルスを拡散する。感染は通常気付かれずに発生し、古い小屋や庭の物置を掃除する人が、ウイルスを含んだ埃を舞い上げる可能性がある。症状は、インフルエンザのような症状から重度の腎障害まで多岐にわたる。問題は、ネズミ自身に病気の症状がないことであり、そのため、暖冬後には爆発的に繁殖する。早期警戒システムではすでに気象データと繁殖期を用いて、特に危険な地域を予測している。こうした情報は、自然環境や森林のような環境で活動する際に、時期に合わせて行動を適応させるのに有効である。また、巣材や餌の痕跡といった初期兆候は、重要な警告信号となる。バイエルン州では、わずか数週間でハンタウイルス感染症の症例が27件から55件に増加した。これは2024年の同時期(21件)の2倍に相当する。古い建物、薪置き場、小屋等に日常的に接触する人は特にリスクが高い。現在、ワクチンや特効薬がないため、予防のみが有効な対策とされている。入室前には部屋を十分に換気し、床面を湿らせ、手袋とFFP2マスクを着用することで、ウイルスを含む危険な粉塵を吸い込むことを防げる。専門家は、排泄物や死骸は乾いた状態で掃かず、必ず密閉容器に入れて処理すること、また、隙間を塞ぐ構造的対策や、定期的に床面を湿らせての清掃も推奨している。特に暖かい夏の時期には、床を湿らせることでホコリの発生を抑える効果がある。今この時期に警戒を怠らなければ、目に見えない深刻な脅威から身を守ることができる。バイエルン州保健食品安全局の広報担当者は、ハンタウイルス感染症の件数は毎年変動しており、主にヨーロッパヤチネズミの個体数に左右されるとしている。ただし、過度に心配する必要はなく、感染率が比較的高い年があるのは珍しいことではないとも述べられている。実際に、2017年、2019年、2021年にも平均を上回る感染者数が記録されている。2025年のハンタウイルス感染症に関して、今年の症例の多くがバイエルンの森林地帯で確認され、その他にも、ヴェルツブルクやアシャッフエンブルク周辺地域、そしてシュヴァーベン・アルプの一部地域でも、年初から感染が報告されている。これらの地域にはブナ林が多く、ヨーロッパヤチネズミが好む生息地となっている。ブナの実が落ちるほど、ヨーロッパヤチネズミとハンタウイルスも増え、感染者数もそれに応じて増加する。
14	パストツレラ感染、ウイルス感染	GOV.UK. https://www.gov.uk/government/publications/emerging-infections-monthly-summaries/infectious-disease-surveillance-and-monitoring-for-animal-and-human-health-summary-june-2024	パストツレラ科はパストツレラ属、アクチノバチルス属、ヘモフィルス属を含むグラム陰性細菌で、主に哺乳類や鳥類を含む脊椎動物の特殊な常在菌及び病原体である。本研究の著者らは、腸管腺癌と診断されたフランスの患者から分離されたパストツレラ科の新しい細菌属及び種である <i>Emayella augustorita</i> を報告した。 最近の研究において、Restvirusの発見と特徴付けが報告され、このウイルスはStatovirusesの新しい分類群と遺伝的に関連はしているが、異なるものである。これらのウイルスは、中国北京の5例の患者の呼吸器サンプルから得たメタトランスクリプトミクス・データの後ろ向き分析によって特定された。この研究では、急性呼吸器疾患の患者でこれまで認識されていなかったウイルスであるRestvirusが発見されたことは、ヒトにおける呼吸器病原体の継続的な出現を浮き彫りにしており、その病原性と臨床的重要性を特徴付けるための更なる調査が必要であると述べている。
15	パストツレラ菌血症	Emerg Infect Dis. 30(2024)1719-1721	【概要】Pasteurellaceae科に属する新しい細菌、 <i>Emayella augustorita</i> が発見された。 【患者の背景】フランスの74歳の女性が腸の腺癌と診断され、胆道プロテアーゼを設置された。 【感染症の経過】患者は2022年1月に重症の敗血症で入院し、血液培養から新しい細菌が分離された。 【細菌の特徴】この細菌は短いグラム陰性桿菌で、カタラーゼ陰性、オキシダーゼ陽性、非運動性、発酵性、好炭酸性、非溶血性である。 【治療と結果】患者は抗生物質治療を受けたが、状態が悪化し、2022年2月に死亡した。

ID	感染症(PT)	出典	概要
16	レンサ球菌感染	Diagnostic microbiology and infectious disease. 112(2025)116868	○日本において、ウマからヒトへの初めてのブタレンサ球菌 (<i>Streptococcus suis</i>) 感染が確認された。56歳のフィリピン人男性が持続性の頭痛及び発熱を主訴として外来診療所を受診した。本例は厩舎の作業員として働いており、1カ月前にウマに引きずられて転倒し、頭部を負傷した結果、左側の急性硬膜下血腫を呈した。退院するまで7日間入院して保存療法を受けた。しかし、頭痛は持続し、受診1週間前に発熱も呈した。過去の病歴は外傷性脳損傷のみであった。最近海外渡航歴はなく、ウマ以外の動物との接触もなかった。イスラム教徒ではなく、豚肉の摂取も制限されてはいなかったが、最近も豚肉の消費や取り扱いはしていなかった。病歴と所見に基づき、細菌性髄膜炎と診断された。入院し、セフトリアキソン4 g/日、アンピシリン12 g/日、バンコマイシン2 g/日の投与を開始した。入院7日目には無熱性となった。血液及び脳脊髄液(CSF)の培養でレンサ球菌が検出された。16SリボソームRNA遺伝子配列とポリメラーゼ連鎖反応により、分離株が <i>S. suis</i> 血清型2であることが確認された。適切な抗生物質療法にもかかわらず、持続性譫妄を発症し、CSFの所見にも改善が見られなかった。頭部の造影CT画像の所見により脳膿瘍と診断され、その後、先行する髄膜炎の根本原因であると考えられるようになった。本例は膿瘍除去のために開頭手術を受け、その後神経科で合計4カ月間静脈内抗生物質療法を受けた。手術中に採取された膿瘍の標本の培養では微生物は検出されなかった。抗生物質療法を完了後、少なくとも60日間は再発性感染や聴覚障害は認められなかった。しかし、失見当識は続いており、フィリピンへの帰国を容易にするための退院計画が進行中であった。本症例はウマと直接接した患者における <i>S. suis</i> 血清型2感染の初めての報告例である。他の動物との接触歴が明確にないため、ウマから <i>S. suis</i> が伝播した可能性がある。いくつかの報告では、 <i>S. suis</i> はウマから分離できることが示されており、ウマが本病原体の潜在的なりザーバー又は宿主となる可能性があることを示唆している。結論として、これはウマから伝播したと疑われる <i>S. suis</i> 感染の最初の報告例であるが、エビデンスはまだ決定的ではない。環境調査には問題のウマとその厩舎を含める方が望ましいが、ウマは競走馬であったため、利害関係者間の利害対立によりそのような調査は不可能であった。
17	旋毛虫症	ProMED-mail 20241107.8719855	コルドバ州において、保健省が5つの自治体で41例の感染者を確認したことで、旋毛虫症のアウトブレイクは健康への警鐘を引き起こした。州政府の発表によると、人獣共通感染症局は、公立及び私立保健所において41例の感染者が確認されたとして注意を呼びかけている。「コルドバでは14例、リオ・クアルトでは6例、コスタ・サカテでは17例、ラス・アリアスでは2例、ロス・モリノスでは2例の感染者が確認された」と彼らは詳細に説明した。このうち、3例が入院中で、残りは外来治療で健康状態は良好である。当局は、コルドバ、リオ・クアルト、コスタ・サカテ、ロス・モリノスでの共通の危険因子は「これらの町の店で購入した自家製ソーセージの消費」と説明した。ラス・アリアスについては、「家庭内の食肉処理場で調理された食品の消費に関連した症例」であることが強調された。調査は、コルドバ州保健省人獣共通感染症局、各自治体、生物産業省検査管理総局、SENASAが、食品事務局の参加を得て実施している。報告されたシナリオを踏まえ、声明は、「無許可の場所や適切な衛生検査を受けていないサラミや豚肉ソーセージの購入や消費を避けるべきである」と強調している。しかし、自家製の食品や出所の疑わしい食品があれば、「摂取を中止し、対応する食品科学部門が除去できるように保管する」必要がある。
18	梅毒	Transfusion. 65(2025)551-558	背景:細菌性因子は輸血により感染するため、米国の献血者は梅毒検査を受ける。ここでは、最近及び過去の梅毒感染が陽性であった献血と、梅毒偽陽性(FP)と分類された献血の11年間の傾向について説明する。 方法:2013年1月1日から2023年12月31日まで(11年間)のデータを、米国赤十字社のすべての献血について集計し、梅毒反応性/陽性と検査された献血者の人口統計/特徴と長期的傾向を評価した。最近、過去、及び合計(最近/過去の組み合わせ)の感染の有病率と、梅毒FP献血を評価した。分類は、トレポネーマ検査と非トレポネーマ検査を使用した既知の血清学的方法に基づいて行われた。 結果:約5,300万件の提供が含まれ、梅毒感染は合計10,365件(最近3,463件、過去6,902件、合計0.02%)、FPは48,719件(0.09%)であった。提供者の人口統計、特徴、及びHBV/HCV/HIV核酸検査の反応性は、梅毒陽性及びFPの提供と非反応の提供とで異なっていた。FPの提供をした提供者は、その後の提供で梅毒陽性(0.3%)及びFP(7.7%)の検査結果が出る割合が高かった。最初のFPから次のFPまでの期間の中央値は3.6カ月であった。最近の感染は11年間で増加しており、過去の感染は2014年にピークを迎え、その後最近の感染と並行して2021~2023年に増加した。季節的なFPスパイクの繰り返しサイクルは、ワクチン接種に対応して2013年秋と2017~2022年に発生した。 結論:献血者の梅毒感染は、米国の人口動向と並行して増加傾向にある。梅毒FP献血者では、その後のFP献血及び原因不明の梅毒陽性献血の割合が高かった。季節的な梅毒FPの急増はほとんどの年で発生していたが、減少傾向にある。
19	炭疽	ProMED-mail 20241109.8719904	○情報源:Bangladesh Post、2024年11月7日。 Natore県Gurudaspur郡で炭疽がウシからヒトに広がっている。郡内のNazirpur連合で炭疽患者として最初に特定されたのは12例であった。感染したウシの肉を喫食したり感染家畜を屠殺し川に流して処分したことで、この病気がヒトに広がったと推測された。感染者は郡内のNazirpur連合のChak Adalat Kha及びMamudpur村で発見された。過去2カ月間に同連合で少なくとも30頭のウシ及びヤギが炭疽菌に感染したと報告されており、疫学疾病対策研究所の研究チームがこれらの村でのアウトブレイクについて調査を開始した。研究チーム長のRahman教授はChak Adalat Kha村だけで11例が炭疽のような感染症の症状を示したと述べた。2024年11月5日には感染者の傷口からサンプルが採取され、検査に送られた。感染者の1人であるJM氏は70万タカ(5859米ドル)相当のウシ6頭を飼育していたと語った。同氏は1カ月以内に4頭のウシが病気になったためそれらを屠殺し、肉を安値で販売した。その結果、同氏は経済的損失に直面し、炭疽菌にも感染した。郡の家畜担当官であるAlmgeer Hossain氏によると、炭疽菌感染の疑いで過去1週間に4頭のウシが屠殺され埋葬された。他の3頭のウシの血液サンプルも検査のために送られた。さらに2024年11月6日から郡全域で家畜の炭疽予防ワクチン接種が開始される。
20	狂犬病	ProMED-mail 20250323.8723089	ProMEDはThe Times of Indiaより、インド、Delhi NCRのGreater Noidaに居住する女性が、ウシの乳汁を介して狂犬病に感染した後に死亡したとの報告を入手した。報告によると、このウシは野良イヌに噛まれて狂犬病に罹患した。近隣地域の数名が狂犬病ワクチン接種を求めたが、女性は予防措置を講じなかった。女性はウシの乳汁を摂取した数日後に症状を発症した。その後、狂犬病感染により死亡した。ウシの乳汁からヒトへの狂犬病の新たな感染経路の可能性が示唆された。
21	非定型マイコバクテリア感染	第100回日本結核・非結核性抗酸菌症学会 (2025/06/06-2025/06/07) P12-2	現在、抗酸菌は190種以上が報告されている。今回、 <i>Mycobacterium</i> sp.新菌種による第一例と考えられる症例を経験したので報告する。症例は60代男性。2週間続く微熱、咳嗽を主訴にX年当院を受診。喀痰抗酸菌塗抹1+、M.intra-PCR陽性となり肺非結核性抗酸菌症と診断した。CAM/RFP/EBIによる治療を開始し、喀痰培養陰性化を確認しX+2年に終了した。X+3年、再度喀痰塗抹陽性となった。コロニー性状は黄色に変化していた。X+4年、質量分析実施したところ同定不能であった。M.intra-PCRは変わらず陽性を示した。完全長ゲノムを用いたAverage nucleotide identity (ANI) 解析では95%以上となる近縁種は得られず新菌種と考えられた。X+8年現在も外来通院を続けており、胸部X線は徐々に悪化傾向である。CAM/RFP/STFXでの治療を継続中であるが、排菌続いている。新菌種による難治性肺非結核性抗酸菌症は経年的に緩徐進行する経過を呈した。

ID	感染症(PT)	出典	概要
22	鳥インフルエンザ	Cell. 188(2025)919–929.e9	高病原性鳥インフルエンザ (HPAI) A (H5N1) ウイルス、特にクレード2.3.4.4b株の現在進行中の循環は、動物衛生と公衆衛生に重大な脅威をもたらしている。米国では飼料摂取量の減少、糞便の硬さの変化、呼吸窮迫、乳量の減少等の臨床症状を特徴とする乳牛のH5N1感染が全国的に広がっており、さらに酪農場労働者（一部は結膜炎や呼吸器症状を呈している）の感染も報告されている。最近マウスやフェレット等の哺乳類モデルでウシH5N1ウイルスの複製、病原性、伝播性を評価する研究が行われ、このウイルスがヒトへの伝播とアウトブレイクに寄与する可能性のある特性を有していることが示唆されている。本研究ではウシH5N1ウイルスと比較のための季節性H3N2ウイルスのヘマグルチニン (HA) の細胞外ドメインを昆虫細胞–バキュロウイルス系でクローニングし、北京の屠殺場で採取されたウシ組織及び大学病院から提供されたヒト組織においてHAと受容体との結合活性を分析した。ウシH5N1ウイルス由来のHAタンパク質はヒト様 α 2–6結合受容体にわずかに結合する一方で、鳥類様 α 2–3結合シアル酸受容体に対して強い選択性（結合しやすさ）を示した。季節性H3N2ウイルスのHAタンパク質はヒト様受容体に対して強い選択的結合を示し、鳥類様受容体への結合は検出できなかった。免疫組織化学的染色により、ウシH5N1ウイルスのHAはウシの肺組織及び乳腺組織に結合することが明らかになり、臨床的観察と一致した。このHAはヒトの結膜、気管、乳腺組織にも効果的に結合し、特に結膜炎の場合にヒトへの伝播のリスクがあることが示された。 α 2–3受容体又は α 2–6受容体と複合体を形成したH5 HAの高分解能低温電子顕微鏡構造により、その受容体結合特性の基礎となる分子的機構が明らかになった。これらの知見は、この新興病原体の組織向性と伝播の可能性に関する重要な洞察を提供する。
23	鳥インフルエンザ	ProMED–mail 20241110.8719927	情報源：CTV News、2024年11月8日。 新たな研究によると、鳥インフルエンザに感染したウシがいる米国の酪農場で検査を受けた労働者の7%が自分自身もウイルスに感染していた。この研究はColorado州及びMichigan州の州保健局と協力し、CDCの疾病調査官が主導した。これは2024年11月7日にCDCが発行する死亡疾病週報に掲載された。検査を受けた115人のうち8例が抗体陽性を示し、仕事中に感染したことを示唆している。しかし症状があったことを覚えていたのは4例だけであり、これは彼らの病状が非常に軽かった可能性があることを示唆している。なお、彼らは目の充血や結膜炎、発熱、鼻汁、咽喉痛、くしゃみ及び下痢を報告した。また、労働者全員がウシの搾乳を行う搾乳室を掃除したと報告した。感染の証拠があったほとんどの労働者がウシの搾乳を行っていたと述べた。しかし推奨されている個人用保護具を着用した者はおらず、作業を行っていたウシがH5N1型に感染していたことを知っていたと答えたのは1例のみであった。
24	鳥インフルエンザ	ProMED–mail 20241120.8720137	情報源[2]：CIDRAP、2024年11月15日。 California州公衆衛生局 (CDPH) は2024年11月15日、農場労働者5例の感染を報告した。州の最新の症例には、2024年11月14日報告された州のCentral Valleyの一角を占めるMadera郡（酪農場アウトブレイクの中心地）からの2例が含まれるようである。郡当局は声明において、症例（確定1例及び推定陽性1例）は発病した乳牛と接触のあったヒトによるものであると述べている。また、CDPHが報告した新たな症例にはFresno郡が2024年11月15日報告した新たな感染が含まれているとみられ、同郡では初の感染となる。同郡公衆衛生局は声明において、当該住民は農場で感染した乳牛と接触したと述べている。California州では最近養鶏場で大規模なアウトブレイクが相次いで報告されているが、CDCの最新の集計によると州の新たな感染例5例は酪農場に関連しているという。
25	鳥インフルエンザ	ProMED–mail 20241223.8720847	乳牛におけるHPAI A (H5N1) の複数州でのアウトブレイクは、2024年3月25日に初めて報告された。ウシにおいてこのような鳥インフルエンザウイルスが検出されたのは、これが初めてである。米国では、2022年以降、United States Department of Agriculture (USDA) のAnimal Plant Health Inspection Serviceが200例を超える哺乳類においてHPAI A (H5N1) ウイルスの検出を報告している。2024年4月1日、CDCは、本ウイルスへの感染が推測されるTexasの乳牛に接触したヒト1例において、ヒトのHPAI A (H5N1) 感染を確認した。本件は、HPAI A (H5N1) が哺乳類からヒトへ感染した初めての事例であると考えられる。2024年5月、CDCは、感染した乳牛への接触歴のあるヒトにおいて、さらにヒトの散発的な症例を報告し始めた。2024年12月20日時点で、16州で乳牛におけるアウトブレイクが認められており、影響を受けた乳牛の群れは、875件である。世界では、アジア大陸、北米大陸、南米大陸、欧州大陸で、哺乳類において散発的なHPAI A (H5N1) が報告されている。最近の哺乳類におけるHPAI A (H5N1) は、特にペルーとチリのアシカ、アルゼンチンのゾウアザラシ、またカナダ、フランス、その他の国のキツネにおいて検出されている。
26	鳥インフルエンザ	ProMED–mail 20250207.8721904	情報源：CBS News、2025年2月5日。 Nevada州の少なくとも4つのウシ群がこれまでウシで見られなかったH5N1型鳥インフルエンザ株の検査で陽性反応を示したことを州農務当局が2025年2月5日に確認し、咳嗽やくしゃみなどの呼吸器症状が報告されている。D1.1に感染したヒトの症状は、以前からウシに広がっている鳥インフルエンザ株よりも重篤である。B3.13と呼ばれるこの株は病気のウシと接触した後に感染したヒトに結膜炎や発熱などの軽度の症状しか引き起こしていない。D1.1鳥インフルエンザ株がウシに広がっていることが発見されたことで、米国の保健当局及びUSDAがこれまで提唱してきた野鳥からウシへのこのウイルスの拡散は稀な一回限りの出来事であるという説は覆されている。2023年後半にTexas州で拡散して以来、ウシの鳥インフルエンザ例はすべてB3.13のみに関連付けられており、当局はこれをウイルスの新たな変異株がトリからウシに繰り返し広がってはいない証拠として挙げている。USDAによると1000近いウシ群が今までに鳥インフルエンザに感染したことが確認され16州で検出されており、最新の事例はCalifornia州で確認されている。Nevada州農務局の広報官によると、D1.1に感染した新たな4つのウシ群は同州Churchill郡で報告された。鳥インフルエンザは2024年12月にも同州Nye郡で報告されたが、これらのウシはB3.13ウイルス株に陽性であった。なお、CDCによると、2024年以降に確認されたヒトの鳥インフルエンザ症例67例中40例がウイルスに感染した乳牛との接触に関連している。
27	鳥インフルエンザ	ProMED–mail 20250212.8722052	情報源：CIDRAP、2025年2月10日。 Central Nevada保健局 (CNHD) は2025年2月10日、Churchill郡の酪農場で病気のウシと接触した労働者に、州で初めてのH5N1型鳥インフルエンザのヒト感染を確認したと発表した。同郡で最近検出されたのはD1.1遺伝子型であり、これはウシから2つ目のH5N1遺伝子型が拡散したことを示しており、これは以前の乳牛のアウトブレイクに関係していたB3.13遺伝子型とは異なる。CDCは2024年初頭以来のこのNevada州の症例を確定ヒト症例リストに追加し、現在の68例のうち41例が酪農従事者に関連することとなっている。 情報源[2]：CBS News、2025年2月10日。 Nevada州の酪農従事者が、先週同州のウシの間で広がっていることが判明した新たな鳥インフルエンザ株に感染したことが確認された。科学者らがD1.1と呼ぶこのH5N1型鳥インフルエンザウイルス株は、米国で今までに少なくとも40例の酪農従事者に感染したB3.13と呼ばれる以前の変異株とは異なる。2025年2月7日にUSDAが公表した分析結果によると、2025年1月にNevada州でD1.1に感染したウシから採取したウイルスに「哺乳動物への適応」が1つ見つかったが、「ヒトへの感染の証拠はない」としていた。

ID	感染症(PT)	出典	概要
28	鳥インフルエンザ	ProMED-mail 20250221.8722292	情報源: MMWR、2025年2月20日。 HPAI A(H5N1) ウイルス、クレード2.3.4.4bは2022年以降米国の野鳥、家禽及び野生動物で検出されており、2024年以降は商業用の乳牛でも検出されている。同ウイルスの遺伝子型B3.13のウシからヒトへの感染例は孤発的、散発的にCalifornia州、Colorado州、Michigan州及びTexas州で発生している。
29	鳥インフルエンザ	ProMED-mail 20250227.8722444	情報源: CDC、2025年2月26日。 2024年4月以降CDCは各州の公衆衛生局と協力し、米国で70例のヒトのH5型鳥インフルエンザを確認している。米国で確認されたヒト感染の大部分(70例中67例)は、感染した又は感染が推定される乳牛や家禽と接触していた。2025年2月24日現在CDCは2025年にヒト3例が発病したH5型鳥インフルエンザを確認しており、感染した乳牛と接触した酪農従事者1例(Nevada州)、感染した商業用の家禽に接触した養鶏従事者1例(Ohio州)及び家の裏庭で飼育していた家禽群が感染した飼い主1例(Wyoming州)である。Nevada州の酪農従事者は、結膜炎(眼の発赤と刺激)を患っていたが回復した。これまでの米国の乳牛に関連する感染症のほとんどは、軽度の呼吸器症状又は結膜炎であった。当該酪農従事者は感染した乳牛に接触し、鳥インフルエンザA(H5N1)ウイルスの検査で陽性反応が出た。